

附属教員の意識調査からみる1年間の教育実習に期待される効果と実現に向けた取り組みのあり方

米村 耕平・有馬 道久・柴田 昭二・七條 正典・野崎 武司・
(保健体育教育講座) (学校教育講座) (国際理解教育) (附属教育実践総合センター) (保健体育教育講座)
坂井 聡・大西 えい子・寺岡 英郎*・大嶋 和彦**・齋藤 知子***・
(特別支援教育講座) (学校教育講座) (附属坂出中学校) (附属高松小学校) (附属幼稚園高松園舎)
西宇 宏美****・奈良 早苗*****
(附属幼稚園) (附属特別支援学校)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部
*762-0037 坂出市青葉町1-7 香川大学教育学部附属坂出中学校
**760-0017 高松市番町5-1-55 香川大学教育学部附属高松小学校
***760-0017 高松市番町5-1-55 香川大学教育学部附属幼稚園高松園舎
****762-0031 坂出市文京町1-9-4 香川大学教育学部附幼稚園
*****762-0024 香川県坂出市府中町綾坂889 香川大学教育学部附属特別支援学校

Research on Period of Practice Teaching based on Consciousness Survey Intended for Teacher of Schools attached to the Faculty of Education at Kagawa University

Kohei Yonemura, Michihisa Arima, Shoji Shibata, Masanori Sichijo,
Takeshi Nozaki, Satoshi Sakai, Eiko Oonishi, Hideo Teraoka*,
Kazuhiko Ooshima**, Tomoko Saito***, Hiromi Nishiu**** and Sanae Nara*****

Faculty of education, Kagawa University, 1-1 Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

**Sakaide Junior High School Attached to the Faculty of Education, Kagawa University, 1-7 Aoba-cho, Sakaide 762-0037*

***Takamatsu Elementary School Attached to the Faculty of Education, Kagawa University, 5-1-55 Ban-cho, Takamatsu 760-0017*

****Takamatsu Kindergarten Attached to the Faculty of Education, Kagawa University, 5-1-55 Ban-cho, Takamatsu 760-0017*

*****Kindergarten Attached to the Faculty of Education, Kagawa University, 1-9-4 Bunkyo-cho, Sakaide 762-0031*

******Kagawa University Affiliated School for Special Needs' Students, 889 Ayasaka, Fuchu-cho, Sakaide 762-0024*

要 旨 本研究では「教育実習期間を1年間とした場合の内容と方法および効果」について香川大学教育学部附属学校園の教員を対象とした質問紙調査を行った。その結果、附属学校園の教員が期待する効果と内容について「教科指導の実践力」、「長期的視座にたった教職全般の実務実践力」、「教職の使命と対人能力」、「子どもを主体とした授業実践力」、「子ども理解と教師の立場の自覚」、「教師間の協働」の観点から検討することができた。

キーワード 教育実習 教員養成課程

1. はじめに

即戦力となる教員を養成することが急務とされている教員養成制度のあり方について、これまで多くの論議がなされてきた。その際、先進諸外国に比して短いとされる我が国の教育実習の実習期間の問題はとりわけその関心も高く、教員養成にとって効果的な教育実習の期間や方法、内容について、行政や研究機関、養成機関を越えて活発な議論が行われてきた。現在、香川大学の教育学部の学生は、最低7週の実習期間を経れば、教員免許状を取得できるが、その一方で6年制の教員養成を見越した論議では、1年間といった長期の実習を課することも視野に入れた検討がなされている。即戦力となる教員を養成するための実習制度を構築していくためには、長期間の教育実習のあり方について今後十分検討していく必要がある。

そこで、本報告では「教育実習期間を1年間とした場合の内容と方法および効果」について香川大学教育学部附属学校園の教員を対象とした質問紙調査をもとに報告を行うこととする。具体的には、1年間の教育実習で得られる効果、附属学校園が教育実習で得られるメリット、1年間実習を行う為に必要な受け入れ側からの条件に関する情報を提供し、1年間の教育実習の内容と方法および効果について検討する。

2. 研究の方法

○質問項目の作成

附属学校園の教員4名、大学教員7名からなるグループにおいて、香川大学が定める「教師に求められる資質能力（教職の使命、対人能力、子ども理解、指導力）をもとにした教育実習の効果に関する項目（表1）および1年間教育実習を受け入れる側の条件、附属学校園側のメリットに関する項目を検討し設定した。

○調査対象と実施時期

対象：香川大学教育学部附属学校園の教員117名（回収数：114、回収率：97.4%）

調査実施時期：平成22年11月11日～11月16日

3. 結果と考察

1) 教育実習の効果

1年間という長期の教育実習の効果として、対象となった附属学校園の教員の50%以上が期待できると回答した項目の因子構造が、香川大学が定める「教師に求められる資質能力」である「教職の使命、対人能力、子ども理解、指導力」の因子構造として捉えられるか確認するため因子分析を行った。その結果、表2に示すとおり36項目による6因子が抽出された。

因子1はその項目の全てが「指導力」の要因として設定された項目であったが、その中でも特に教科指導に関する項目が多かったため、「教科指導の実践力」と命名した。この因子から明らかなように、教科指導に関わって身につく重要な指導法は1年程度の実習期間が必要であり、現行の実習期間では十分でないことが理解できる。

因子2は、「学校の年間指導計画に沿った教科指導の力」や「長期的な目標の視点から、児童生徒を理解する力」、「学級経営をする際に必要となる基本的な知識と指導力」、「教職における教科指導以外の校務を理解し遂行する力」といった項目から特徴付けられるため「長期的視座にたった教職全般の実務実践力」と命名した。この因子から、1年間の教育実習では、教科指導以外の校務に長期的な関わりが期待でき、教職全般に関わる力が身につくものと考えられる。

因子3は、「子どもの安全管理・健康管理に必要な内容を意識した行動ができる力」や「教師として遵守しなければならない基本的な法律や倫理規定を理解する力」、「自主的かつ適切に教員、児童生徒と関わる力」、「挨拶や礼儀など社会人としての自覚」、「教師間で協力して校務を遂行する力」といった項目で構成され、これらは「教職の使命」および「対人能力」の要因として設定された項目であった。したがって、因子3を「教職の使命と対人能力」と命名した。1年間の教育実習を想定した場合、これらの要因は一つの因子として捉えることができ、その

表1 教育実習の効果に関する質問項目

<p>○教職の使命</p> <ol style="list-style-type: none"> 1) 教職における教科指導以外の校務を理解し遂行する力 2) 実習授業を経験するだけでなく、実習授業を学習成果の観点から振り返ることができる力 3) 教師としての立場を自覚する力 4) 年間を通した体調管理の力 5) 学級や学校の実態を見取る力 6) 教育現場の問題点や課題を感じ取り、対応の仕方を学ぶ力 7) 他機関との連携の在り方に関する知識 8) 教育現場に求められる教師について理解する力 9) 子どもの安全管理・健康管理に必要な内容を意識した行動ができる力 10) 教師として遵守しなければならない基本的な法律や倫理規定を理解する力 11) 「教師になりたい」という強い意志 12) 現代の教育問題の動向についての理解
<p>○対人能力</p> <ol style="list-style-type: none"> 13) 教師間で協力して校務を遂行する力 14) 挨拶や礼儀など社会人としての自覚 15) 自主的かつ適切に教員、児童生徒と関わる力 16) 実践現場で生じる様々な出来事に対する適切な判断力 17) 自分とは異なる意見を受け入れる力 18) 人の良いところを見つけ伝える力
<p>○子ども理解</p> <ol style="list-style-type: none"> 19) 家族構成、生育歴、家庭内の事情、放課後の活動、休日の過ごし方など多角的に子どもを理解する力 20) 家庭訪問を通して子どもを見る力 21) 長期的な目標の視点から、児童生徒を理解する力 22) 個々の成長や集団の成長を見取る力 23) 子どもの発達段階についての基礎的な知識 24) 各学年段階の子どもの思考力や言語力についての理解 25) 子どもの行動を読み取り理解しようとする姿勢 26) 子どもの立場に立ったカウンセリングマインドについて理解する力
<p>○指導力</p> <ol style="list-style-type: none"> 27) 様々なタイプの子どもに対して伝わりやすいように説明を工夫する力 28) 子どもの特性を把握しながら効果的に指導しようとする手立てについての知識 29) 多くの授業実践を通して得られるより実践的な指導技術 30) 様々な教科の授業実践を通して得られる各教科の指導技術 31) 現職教育への参加を通して得られる多角的な視点から研修する力 32) ベテラン教員からの指導を通して得られる指導技術 33) 若手の教員同士での研修を通して得られる教員としての自分を具体的にイメージする力 34) 学習規律を確立する力 35) 各教科教育の指導方法についての知識の獲得と実際に訓練する機会 36) 単元や授業の構成力 37) 専門教科の基礎的な内容の理解 38) 各教科の基本的な単元（教材）の指導内容についての理解 39) 学習内容および子どもの実態に応じた授業の流れを構想し、指導案を作成する力 40) 子どもの反応を予想して効果的な発問を行う力 41) 授業の流れに応じた効果的な板書を行う力 42) 子どもの思考を促す効果的な資料や教材を用意する力 43) 子どもを学ぶ主体として位置づける授業の方法についての理解 44) 授業記録作成についての知識と技術 45) 学級経営をする際に必要となる基本的な知識と指導力 46) 生徒指導、教育相談に関する基本的な知識と指導力 47) 1年間の学校の流れを体験することを通して得られる、将来教員になったときに見通しを持って行動する力 48) 運動会や卒業式などの学校行事に関する指導力 49) 学校の年間指導計画に沿った教科指導の力

効果が合わせて期待できるものと考えられる。

因子4は「子どもを学ぶ主体として位置づける授業の方法についての理解」や「子どもの反応を予想して効果的な発問を行う力」、「学習内

容および子どもの実態に応じた授業の流れを構想し、指導案を作成する力」といった項目で特徴付けられるため「子ども主体とした授業実践力」と命名した。これらの項目は、高い教授技

表2 50%以上の教師が期待する実習の効果の因子構造

	因子1	因子2	因子3	因子4	因子5	因子6
	教科指導 の実践力	長期的視 座にたっ た教職全 般の実務 実践力	教職の使 命と対人 能力	子どもを 主体とし た授業実 践力	教師の立 場を自覚 した子ど も理解	教師間の 協働
38) 各教科の基本的な単元(教材)の指導内容についての理解	.901					
37) 専門教科の基礎的な内容の理解	.692					
29) 多くの授業実践を通して得られるより実践的な指導技術	.684					
35) 各教科教育の指導方法についての知識の獲得と実際に訓練する機会	.678					
30) 様々な教科の授業実践を通して得られる各教科の指導技術	.605					
28) 子どもの特性を把握しながら効果的に指導しようとする手立てについての知識	.595					
36) 単元や授業の構成力	.578					
27) 様々なタイプの子どものに対して伝わりやすいように説明を工夫する力	.444					
8) 教育現場に求められる教師について理解する力	.282					
49) 学校の年間指導計画に沿った教科指導の力		.807				
47) 1年間の学校の流れを体験することを通して得られる、将来教員になったときに見直しを持って行動する力		.796				
45) 学級経営をする際に必要となる基本的な知識と指導力		.655				
48) 運動会や卒業式などの学校行事に関する指導力		.560				
6) 教育現場の問題点や課題を感じ取り、対応の仕方を学ぶ力		.538				
21) 長期的な目標の視点から、児童生徒を理解する力		.536				
31) 現職教育への参加を通して得られる多角的な視点から研修する力		.483				
1) 教職における教科指導以外の校務を理解し遂行する力		.438				
9) 子どもの安全管理・健康管理に必要な内容を意識した行動ができる力			.772			
10) 教師として遵守しなければならない基本的な法律や倫理規定を理解する力			.638			
15) 自主的かつ適切に教員、児童生徒と関わる力			.618			
5) 学級や学校の実態を見取る力			.614			
16) 実践現場で生じる様々な出来事に対する適切な判断力			.573			
4) 年間を通じた体調管理の力			.476			
14) 挨拶や礼儀など社会人としての自覚			.432			
13) 教師間で協力して校務を遂行する力			.404			
43) 子どもを学ぶ主体として位置づける授業の方法についての理解				.742		
40) 子どもの反応を予想して効果的な発問を行う力				.671		
39) 学習内容および子どもの実態に応じた授業の流れを構想し、指導案を作成する力				.642		
44) 授業記録作成についての知識と技術				.629		
42) 子どもの思考を促す効果的な資料や教材を用意する力				.603		
41) 授業の流れに応じた効果的な板書を行う力				.535		
25) 子どもの行動を読み取り理解しようとする姿勢				.401		
23) 子どもの発達段階についての基礎的な知識					.737	
24) 各学年段階の子どもの思考力や言語力についての理解					.590	
3) 教師としての立場を自覚する力					.480	
32) ベテラン教員からの指導を通して得られる指導技術						.526
33) 若手の教員同士での研修を通して得られる教員としての自分を具体的にイメージする力						.483
22) 個々の成長や集団の成長を見取る力						.341
2) 実習授業を経験するだけではなく、実習授業を学習成果の観点から振り返ることができる力						.327
因子1:教科指導の実践力	—	.509	.503	.594	.447	.137
因子2:長期的視座にたった教職全般の実務実践力		—	.622	.492	.476	.034
因子3:教職の使命と対人能力			—	.485	.491	.241
因子4:子どもを主体とした授業実践力				—	.421	.089
因子5:教師の立場を自覚した子ども理解					—	.124
因子6:教師間の協働						—

術や子どもとの関係性が要求される子どもを学びの中心とした授業実践を実現する力であり、1年間の教育実習ではこのような高度な指導力の育成も期待される。

因子5は「子どもの発達段階についての基礎的な知識」や「各学年段階の子どもの思考力や

言語力についての理解」、「教師としての立場を自覚する力」の項目によって構成されているため、「教師の立場を自覚した子ども理解」と命名した。子どもの発育発達に関する知識は教師の立場を自覚する力の一部であり、1年間の教育実習ではその高まりが期待できる。

因子6は「ベテラン教員からの指導を通して得られる指導技術」と「若手の教員同士での研修を通して得られる教員としての自分を具体的にイメージする力」の項目で構成されていることから「教師間の協働」と命名した。実習生と実習校教員との間の同僚性の高まりともいうべき効果が期待できる。

2) 附属学校園が得られるメリット

1年間の教育実習の実施を仮定した場合、受け入れ先となる附属学校園が得られるメリットについて調査した結果が表3である。対象となった附属学校園の教員の50%以上がそのメリットとして期待することは「1. 副担任的な立場で関わってもらうことにより、別の視点か

ら子どもたちを見る目ができ、子ども理解を深めることができる」、「3. 緊急時など、複数の教員がいることで、安全への対応が図りやすい」の2つであった。これは、附属学校園教員が実習生を1人の教員として受け止めている姿勢を示すことであり、附属学校園の教員の校務負担減という視点からではなく附属学校園で学んでいる子どもたちにとってのメリットという視点で期待していることがわかる。

他方、50%以上の教員が期待しなかったメリットについては表4に示すとおりである。この項目から、実習生にどこまで権限と責任を与えるかを検討する必要性があること、実習生が雑用係になる恐れがあることといった解決しなければならぬ課題が明らかになった。

表3 50%以上の教師が期待する附属学校園のメリット

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">1. 副担任的な立場で関わってもらうことにより、別の視点から子どもたちを見る目ができ、子ども理解を深めることができる。3. 緊急時など、複数の教員がいることで、安全への対応が図りやすい。 |
|--|

表4 50%以上の教師が附属学校園のメリットとして期待しなかった項目

- | |
|--|
| <ol style="list-style-type: none">2. テストの採点や、宿題のマル付け、配布物の印刷などをしてもらうことによって教師の負担が軽減される。4. 附属の教員は、出張等で教室を空けることが多いが、指示を出していれば、その間の対応を取ってもらいやすい。5. 放課後の陸上や水泳などの指導にも関わってもらえると、教師の負担が軽減される。6. 実習生と共に指導案を検討する機会をたびたび持つことにより、教師側も勉強になる。7. 生徒指導上の人員が増加する。8. 教科研究員の増加による補助員が強化される。 |
|--|

3) 附属学校園が実習生を受け入れる条件

1年間の教育実習を実施する際に、受け入れ先となる附属学校園の教員が必要と考える受け入れ条件について調査した結果は表5に示すとおりである。表からわかるとおり、実習生の意欲や自覚を求めるものと1年間の教育実習を可能とする環境整備に関するものの大きく2つ条件が示されている。1年間もの長期にわたって実習を行うには、実習生自身のモチベーションや取り組みへの姿勢が受け入れる実習校側に

とっても重要な条件であり、言い換えれば、中途半端な気持ちや考えの実習生は受け入れられないというメッセージでもあるといえる。また、実習生担当の専任教員の配置や実習生の権利や責任に関する規定の整備、1年間の教育実習を効果的にするためのプログラムの整備、それに応じた大学側のカリキュラム編成などの条件から、短期間では解決できない現実的な問題が多く存在していることを改めて確認することができた。

表5 50%以上の教師が求める1年間の教育実習の受け入れ条件

<p>2. 実習校の活動に専念できること</p> <p>4. 実習生に意欲があり、前向きであること</p> <p>7. 教育実習生担当の専任教員の加配</p> <p>9. 1年間の実習に耐えられるような大学のカリキュラムの確立</p> <p>10. 1年間の実習に耐えられるような実習プログラムの作成</p> <p>12. 実習生に開示する子どもの個人情報に関する規定を事前に整備すること</p> <p>15. 1年間実習を行う実習生の自覚</p>
--

4. まとめ

本調査の結果、1年間の教育実習の内容と方法および効果に関わって以下のことが明らかになった。

1) 附属学校園の教員が期待する1年間の教育実習の効果と内容の検討

因子1「教科指導の実践力」の向上が期待されるが、それらを実現させるためには実習中に各教科、各領域の単元を通じた授業実践を実習生が行う必要がある。

因子2「長期的視座にたった教職全般の実務実践力」の向上には、学校の年間計画に基づく教職全般の職務実践を実習生が体験する機会の保障が求められる。

因子3「教職の使命と対人能力」では、実習校が抱える学校内外の問題や課題に実習校の教員と共に関わりながら取り組む活動を実習生が体験的に行う必要がある。

因子4「子どもを主体とした授業実践力」の向上には、子どもの主体性を引き出し子どもが学びの中心となる授業実践を実際に行えるような指導技術の向上を保障し、各教科あるいは各領域で実際に子どもを主体とした授業実践を行う機会の提供が必要になる。

因子5「子ども理解と教師の立場の自覚」の高まりを保障するためには、子どもと共に学校の多様な活動に参加し、教師としての子どもとの距離の取り方や子どもの実態・能力を把握する活動を実際に体験しなければならない。

因子6「教師間の協働」については、実習生が教員団のメンバーとして校内研に参加し、実

習校の先生と共に授業研究を行う機会を保障する必要がある。

2) 教育実習の受け入れ条件から1年間の教育実習の内容と方法の検討

大学教育において実習生の教職に対するモチベーションを高め責任感を育てるために、教職関連科目の充実が求められる。また、実習生が実習に専念できる教員養成カリキュラムの構築や長期の教育実習を考慮した大学のカリキュラムづくり（学部大学院連携による6年制のあり方）が必要となる。くわえて1年間の教育実習での効果を保障するプログラムの開発、評価、改善を大学教員と実習校の教員が不断の活動として行い、効果を保障できる実習日数、授業時数の検討、教科指導以外の職務活動を遂行する為に必要となる能力の育成方法等を明らかにしていくことが求められる。また、上記の効果や内容・方法を保障できるような実習生の権限や責任に関する環境の整備をすることによって、1年間の教育実習がより現実的で確かなものになっていくと考えられる。

参考文献

教員の資質能力向上特別部会（2011）教職生活全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（審議経過報告）. 中央教育審議会.http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo11/sonota/_icsFiles/afieldfile/2011/02/16/1301982_1.pdf